

プラスチック製ストロー廃止

リサイクルされずに捨てられるプラスチックごみによる海洋汚染が問題視される中、外資の大手外食チェーンなどでプラスチック製ストローの提供をやめる動きが広がっている。海を漂う直径5ミリ以下の中マイクロプラスチックを魚などが食べ、悪影響が懸念されているからだが、ストロー廃止には賛否がある。マイクロプラスチック問題を研究する京都大大学院の田中周平准教授と、ストローの国内トップメーカー、シバセ工業（岡山県）の磯田拓也社長に聞いた。

—プラスチック製ストロー廃止をめぐる国内外の動きをどう評価する？
「プラスチックがもたらす環境への影響に配慮しよう」という社会の流れが、少しずつ出てきたということではないか。プラスチックは耐久性も高く、非常に便利。ただ、その耐久性ゆえに環境の中に残留しやすい。プラスチックは社会で広く利用されており、すべての利用をやめるという選択は現実的ではない。だから何がどれくらい不適切に廃棄され、どのような影響を

生態系に与えているのか。その適切な管理方法は何かについての研究が進められている。私は廃棄プラスチックが、マイクロプラスチックと呼ばれる微細な破片に変化した際の水域への影響を研究しているが、まずは社会がこの問題について考えるきっかけになればと思っている」

—プラスチック製ストローの廃止はプラスチックごみ全体の問題解決にどれほど寄与するか
「寄与はそれほど大きくなかった。できることから進めようということだろう。使い捨てストローが注目されたの

一ツポンの議論



磯田拓也氏

（いそだ・たくや）昭和35年、岡山県生まれ。大分大工学部卒。日本電産に入社し、開発部で電子回路設計を担当。平成10年、芝勢興業（現・シバセ工業）に入社。本社工場長を経て17年、社長に就任。



田中周平氏

（たなか・しゅうへい）昭和50年、大阪府生まれ。立命館大学院博士課程修了。京都大助手などを経て平成20年から現職。琵琶湖や大阪湾、東南アジアなどマイクロプラスチック汚染の実態調査を進めている。

—マイクロプラスチックは生態系にどのような影響を及ぼしているか
「魚類などを対象にした実験ではエラや消化管に蓄積されたという報告がある。小さいほど吸収が容易だ。それが循環し、私たちの体にもプラスチックは入り込んでいる。それがどれほどコストが上昇しても、環境への影響を考え社会がそちらを選択するという契機になれば、問題解決への寄与も大きくなるのではないか」

—マイクロプラスチックは生態系にどのような影響を及ぼしているか

「日本ではピューティフルカントリー

だ」と言う。水道水が飲め道ばたに

はほとんどごみが落ちていない。

本はどのようにして問題解決に日

本はどう貢献できるか

「海外からの観光客は口をそろえて

「日本はピューティフルカントリー

だ」と言う。水道水が飲め道ばたに

はほとんどごみが落ちていない。

本はどのようにして問題解決に日

本はどう貢献できるか

「日本はピューティフルカントリー

だ」と言う。水道水が飲め道ばたに

はほとんどごみが落ちていない。

本はどのようにして問題解決に日

本はどう貢献できるか